道教大附属函館中 探究懇話会

研究の面白さを学ぼう

お茶の水女子大・毛内助教

【函館発】道教育大学附属函館中学校（小林真二校長）は11月下旬、同校で2年生を対象に探究懇話会を開いた。お茶の水女子大学理学部の毛内拡助教が来校し、脳科学に関する研究や自身の進路選択について講話した＝写真＝。

2年生の個人課題探究の本格始動を前に、研究の面白さなどを学び、活動意欲の向上を図ることが目的。

講師は同校卒業生で、生体組織機能の研究を進めるお茶の水女子大理学部の毛内助教。「頭が良い」とはどういうことか？～研究のおもしろさを学ぼう！」と題して講話した。

毛内助教は、特別支援学校生徒と出会った高校時代のボランティア活動を振り返り、脳科学研究の道を志したきっかけに触れた。研究を進める中で、答えがない絶望感に打ちひしがれたことを説き「答えは自分で探すしかないという気付きを、若いうちから経験してほしい」と伝えた。

「脳は一人一つ持っているもの」「現代にあるものは全て脳がつくっている」とし「脳科学は現代人の必修科目」と強調。脳死の定義を覆すような世界の研究成果や、日々発展を遂げるブレインテック市場について解説した。

また「脳は基礎代謝の2割を占めるが、非常に省エネ」とし、認知バイアスがかかる過程を「正しく脳が動いている証拠」と説いた。感覚系への刺激は脳で全て電気信号に変換され「目が見えるだけでは情報は受け取れない。様々な経験が視野を広げる」と説明。「人に言われたことだけでは、最終的に得たものに気付くことが難しい。能動的に経験を積む必要がある」と伝えた。

生徒は「頭が良くなる方法」を質問。毛内助教は「新奇体験と情動喚起が、脳内をメンテナンスする細胞を活発化させる」「失敗からの経験、いろいろな人との出会いを大切に」と呼びかけた。

授業を終え、中谷真彩さんは「研究者を志しているが、関心がさらに高まった。新しいことにチャレンジする意識を持ちたい」と感想を寄せた。

函館中部高定時制 1日防災学校

有事の際は地域と協力

避難訓練等通し意識高揚

「思う」と感想を寄せた。

避難訓練のあと、渡島総合振興局危機対策推進課職員が講話した。避難後に必要な支援を受けられないなどの要因による災

る巨大地震の被害想定を示し「冬の夕方に地震が発生すると被害が大きくなりやすい」と示唆した。市内の津波ハザードマップから、同校への津波到達にかかる時間が49分間だと提示。「約1時間で移動できる距離は約800㍍。安全な場所まで逃げるためには案外時間がかかる」と、他地域の事例を交えながら伝えた。

避難所運営ゲーム「Doはぐ」では、生徒と地域住民が共に適切な避難所運営